

山部赤人の「富士の山を望る歌」 —— 享受と創造 ——

Poem on a Distant View of Mount Fuji by YAMABE-NO-Akahito:
The Enjoyment and Creation

鈴木武晴

SUZUKI Takeharu

一、序

万葉集の巻三には、山部赤人の富士歌が収録されている。題詞・長歌三二七番歌・反歌三二八番歌の順による構成で、掲げれば次のとおり（書き下し本文は伊藤博『萬葉集釋注二』^{注1}による）。

山部宿禰赤人、富士の山を望る歌一首并せて短歌
天地の 分けし時ゆ 神さびて 高く貫き 駿河なる 富士
の高嶺を 天の原 振り放し見れば 渡る日の 影も隠ら
ひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じ

くぞ 雪は降りける 語り告げ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高
嶺は (三二七)
反歌
田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降り
ける (三二八)

右は、日本最初の富士歌で、富士の姿を眼前にほうふつさせる傑作である。

傑作とは言え、先行する諸作品に学んでの作歌の努力に裏打ちされていることを、当面歌の語句・表現の検討を通して述べることに、本稿の主な目的である。その過程で、当面歌が同伴家持や同伴

池主の立山の歌などに多大な影響を与えたことも浮き彫りになるであろう。

二、先行歌の享受と創造

赤人富士歌の題詞「富士の山を望る歌」(原文「望不盡山歌」)のよ
うに、山を視覚対象として「――の山を望る」と記した題詞は、万
葉集にこの一例のみ。このことは、和歌史上における山の叙景歌の
誕生を語り告げている。

長歌三一七の冒頭二句「天地の分れし時ゆ」は、柿本朝臣人麻呂
歌集所出の七夕歌の

天地と別れし時ゆ己が妻しかぞ離れてあり秋待つ我は

(卷十・二〇〇五番歌)

の上二句を意識し、助詞「と」を「の」に改変して用いたものと考
えられる。「天地と別れし」は「天と地と別れた」の意で、一句目
から天と地との分離が強く表わされるのに対し、当面歌の「天地の
分れし」は「天地の相分かれた」の意味で、『古事記』の創世神話
の冒頭「天地(の)初めて発りし」を「天地と別れし」よりもいつ
そう強く想起させる。赤人が神亀二年(七二五)に詠んだ卷六・九
三三番歌の冒頭二句に、「天地の遠きがごとく」(「天地が無窮であるよ
うに」の意)と詠んでいることも参照される。

当面歌第三句の「神さびて」に目を移そう。柿本人麻呂の吉野讃
歌(卷一・三六〇三九番歌)の長歌二八に「やすみしし我が大君 神

ながら神さびせすと」と用いられており、卷一・四五番歌、卷二・
一九九番歌の人麻呂作や、人麻呂歌集所出の卷十一・二四一七と卷
十二・二八六三番歌にも見られる。

しかし、これらは、山そのものに対して用いた例ではない。赤人
は如上の人麻呂作歌や人麻呂歌集の「神さぶ」の用法を知りつつ
も、直接には山に対しての例である「藤原の宮の御井の歌」(卷一・
五二一三番歌)の長歌五二の「……耳成の青菅山は 背面の大き御門
に よろしなへ神さび立てり……」の語句・用法に学んだものと思
えられる。

山を構成する岩に対して用いた、卷七の「古集」所出歌、

神さぶる岩根ごごしきみ吉野の水分山を見れば悲しも

(二一三〇番歌)

の用法も心得ていたであろう。

「神さびて」に続く第四句「高く貴き」のように、山に対して用
いた例は、他に一例。持統朝の伊勢行幸の折の作と覚しき卷十三・
三三三四番歌に

やすみしし我ご大君 高照らす日の御子の きこしをす御食つ国
神風の伊勢の国は 国見ればしも 山見れば高く貴し 川見れば
さやく清し(後略)

とある。赤人は、この歌の「山見れば高く貴し」の語句・用法をし
かと心に刻みつけていたのであろう。

当面歌の第五句六句「駿河なる富士の高嶺を」について見てみよう。この表現は言うまでもなく、東海道の駿河から望た富士に基づく。集中他に、赤人富士歌の次に在る、高橋朝臣虫麻呂歌集所出の虫麻呂作歌と認められる「富士の山を詠む歌」（巻三・三一九～三二一番歌）の長歌三一九に、「駿河なる富士の高嶺は見れど飽かぬかも」とあり、巻十一・二六九五番歌にも

我妹子に逢ふよしを無み駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ

と歌われている。「駿河なる富士の高嶺」の表現は、赤人歌が最初で、他はその表現に拠ったものと考えられる。「富士の高嶺」の表現に限定した場合にも、赤人富士歌の長歌三一九に二例。虫麻呂富士歌の長歌三一九に二例あり、先掲の「駿河なる富士の高嶺は」の他に、赤人歌の「白雲もい行きはばかり」を意識して「……富士の高嶺は 天雲もい行きはばかり」と詠んでいる。その他の例に、先掲巻十一・二六九五番歌。一首おいて二六九七番歌（富士の高嶺の燃えつつ渡れ）、その或本歌（富士の高嶺の燃えつつも居れ）がある。

赤人の長歌三二七番歌の「富士の高嶺」の表現は、「天地の分けし時ゆ 神さびて高く貴き 駿河なる富士の高嶺を」という冒頭からの文脈の中で富士の高さを強調するために必然的に用いられた表現であることに留意すれば、「富士の高嶺」の表現、そして「駿河なる富士の高嶺」の表現は、赤人が創始した表現と見ることができ

る。赤人は「富士の高嶺」の表現の他に、「伊予の温泉に至りて作る歌」（巻三・三三二～三番歌）の長歌三三二に「……島山の宜しき国と

こごしかも伊予の高嶺の……」と、うるわしい自然の国の象徴として聳え立つ伊予の高嶺（石鍾山）を詠んでいる。「駿河なる富士の高嶺」も同様の意識に立つ表現であろう。

「富士の高嶺を」の「富士」の原文表記は、「布土」。「布」の字は「ふ」の音を表わすとともに、富士の雪を白布に見立てて用いたものと考えられる。反歌三一八の第三句「真白にぞ」の原文表記「真白衣」がそのことを端的に物語っている（拙著『山部赤人の富士の山を望る歌』）。外部徴証として、東歌の常陸の国の歌（巻十四・三三五一番歌、

筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき子ろが布乾さるかも

が参照される。

赤人の富士の雪に対する美意識を投影する表記が「布」であり、以後、「布土」（三二二）、高橋虫麻呂富士歌、「布仕」（巻十一・二六九七番歌）、「布時」（巻十四・三三五七番歌）、「布自」（巻十四・三三三八番歌）、同歌の一本の歌」と記されている。いずれも赤人富士歌の表記の影響を受けていると考えられる。

赤人歌の「富士の高嶺を」について、角川ソフィア文庫の伊藤博『新版 万葉集』に「富士の高嶺よ、その高嶺を、の意」と注している。「を」は格助詞であるけれども、ここは詠嘆の心を込めての間投助詞性を有しているので、妥当な注と言える。口頭で歌う場合には、詠嘆の思いをこめて歌う必要がある。

その「富士の高嶺」を第七句・八句「天の原振り放け見れば」とうたっている。音数律の関係もあるが、万葉集中の「その山を振り

「放け見つつ」(巻二・一五九番歌)、「青山を振り放け見れば」(巻十三・三三〇五、三三〇九番歌)のように歌わずに、「富士の高嶺を 天の原振り放け見れば」と「天の原」を介在させて詠んだ点に赤人の工夫がある(小野寛「山部赤人の長歌の構成」、『万葉集歌人摘草』^{注4}所収。その結果、「富士の神性と崇高さ、空間的な無限性をうち出し」(坂本信幸「赤人の富士の山の歌」、『セミナー万葉の歌人と作品第七巻』^{注5}所収、そびえ立つ富士の姿を天空に浮き彫りにしている)。

「富士の高嶺を 天の原振り放け見れば」に拠る情景を、次の第九句から十六句までに、「渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり 時じくぞ雪は降りける」と歌っている。ありうべき景を対句仕立てにして並べあげる物ぼめの伝統の手法に拠りながら、時間や空間を絶した尊厳なたたずまいを描出している(先掲「釋注」)。

この前半四句の表現は、柿本人麻呂の「泣血哀慟歌」の「渡る日暮れ行くがごと 照る月の雲隠ること」(巻二・二〇七番歌)を応用したものと考えられる。「影も隠らひ」の「隠らひ」の原文表記「隠比」も他に一例、人麻呂の石見相聞歌の巻二・一三五番歌に見えるのみ。「照る月の光も見えず」の「名詞十も見えず」の表現も、人麻呂の巻三・二六二番歌に「矢釣山木立も見えず」とあり、その用法の影響も見て取れる。

しかし、赤人は「渡る日の影」「照る月の光」と、日月の「影」(光)を強調的に表わし、その光も隠れて見えないほど、富士が高くそびえ立つさまを歌った点に工夫が認められる。

そして、さらに「白雲もい行きはばかり」と、富士の前をおそるおそるゆつくりと移動してゆく白雲の擬人的表現を添加し、これに

雪を合わせて、「時じくぞ雪は降りける」と詠嘆した点にも、叙述の工夫があると言える。

「い行きはばかり」は集中他に一例。巻十二・三〇六九番歌に

赤駒のい行きはばかり 真葛原何の伝て言直にしよけむ(傍線部
の原文は「射去羽計」)

とある。この歌は、『日本書紀』天智天皇条の歌謡一二八に、童歌として結句を「直にし良けむ」として載せる。紀歌謡の「い行きはばかり」は、原文「以喩企波々箇屢」。赤人は三〇六九番歌と紀歌謡一二八の双方を考慮して「白雲」に応用し、「白雲もい行きはばかり」と詠んだのであろう。ちなみに、赤人富士歌の影響が見て取れる高橋虫麻呂の富士歌には、長歌三一九に赤人歌の「い行きはばかり」と表現・表記が全く同じの原文「伊去波代加利」があり、反歌三二一には上掲三〇六九番歌と類似の原文「伊去羽斤」が用いられている。虫麻呂は赤人歌と三〇六九番歌の両者を表記まで考慮して用いたものと察せられる。

赤人富士歌の「時じくぞ雪は降りける」に関して、『釋注』に、
日・月・雲・雪の四景のうち

赤人が実際に見ているのは、雪であろう。長歌の景の叙述が、「時じくぞ雪は降りける」で終わり、それを承けて、反歌が、「真白にぞ雪は降りける」で結ばれ、この一点に焦点が注がれているからである。「雪は降りける」は、雪が降り積もって存在するさまをいう。「けり」は「来あり」の略で、過去の動作や作

用が現在まで継続して存在することを表わすから、「けり」のついた表現はこういう意味を示すことが多い。つまり、現在雪が降りつつあるのではなくて、降り積もった雪を頂く富士の山頂が蒼空にくっきり浮き立っているさまを述べたのが「雪は降りける」なのである。

と述べている。首肯すべき見解である。

この「時じくぞ雪は降りける」については、先行歌の天武天皇御製歌（巻一・二五番歌）の

み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける
 間なくぞ
 雨は降りける（後略）

や、その異伝の「或本の歌」（二六番歌）の

み吉野の 耳我の山に 時じくぞ 雪は降りるといふ
 間なくぞ
 雨は降りるといふ（後略）

や、この異伝の影響が認められる巻十三・三二九三番歌の

み吉野の 御金の岳に 間なくぞ 雨は降りるといふ
 時じくぞ
 雪は降りるといふ（後略）

の傍線部の表現との関連が考えられる。

そこで、三つの表現を仔細に見ると、赤人は、二五番歌の「雪は

降りける」と、二六番歌・三二九三番歌の「時じくぞ」を組み合わせて、「時じくぞ雪は降りける」という別の表現を成したことがわかる。「時なくぞ」（二五番歌）よりも「時じくぞ」（二六・三二九三番歌）、「雪は降りるといふ」よりも「雪は降りける」という判断が働いて、富士の実態に適した表現にしたのである。

赤人の富士歌は、この「時じくぞ雪は降りける」に至る表現の中に、持統女帝の吉野行幸の折に柿本人麻呂が詠んだ吉野讚歌の巻一・三八番歌などの影響が見て取れたが、幾度も吉野行幸をおこなうに至った契機の原点と言える天武天皇の吉野御製歌と、その異伝の表現をもとに類似の別の表現を成したことが明らかとなったのである。

このことは、赤人が聖地吉野の神性によって富士の神性を高めようとしたことを表しているよう。駿河の富士でありつつ、聖地吉野の神性に裏うちされた大和（日本）の聖なる山であるとの意識が赤人にある、その意識をこめて「時じくぞ雪は降りける」と歌ったのではないか。そうであるからこそ、長歌三一七の末二句において、「語り告げ言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は」と主張したのである。そして、虫麻呂は赤人のこうした意識を読み取って、長歌三一九において「日の本の大和の国の 鎮めともいはず神かも 宝ともなれる山かも」と詠んだのである。

原文「語告」には、訓みと意味に異説があるけれども、本稿の捉え方に支障はない。が、原文「語告」の訓みと意味は重要なことであるので、節をあらためて考察することにする。

三、原文「語告」の訓みと意味

通説は原文「語告」の「告」を「継ぎ」の借訓文字と見、「語り」の訓みと意味を採る。しかし、紀州本に「語り告げ」の訓みを記しており(校本萬葉集)、注釈書では『代匠記』初稿本と精撰本、山田孝雄『萬葉集講義』、先掲『釋注』、拙著『テーマ別万葉集』・先掲『山部赤人の富士の山を望る歌』に「語り告げ」と訓んでいる。確かに、三二三番歌の「語之告者」や二八七三番歌の「謂告我祢」の「告」のように、原文「告」を「継ぎ」の借訓文字として用いた例はある。けれども、『釋注』には『代匠記』の訓に従う理由について、「下一段動詞『告ぐ』にはツゲ・ツグの活用形は存するものの、ツギの活用形なく、『継ぎ』の借訓文字と見ることに疑問がある。」と述べている。

妥当な見解と思われる。が、このことだけでは通説に従う人々を納得させるに十分とは言えない。そこで、本稿はその他の根拠も挙げる。

まず、原文表記の面。先に「告」が「継ぎ」の借訓文字として用いられている例を確認したが、一方で原文「語告」を「語り告げ」と訓む例も存在する。天平二年(七三〇)の大伴旅人の亡妻挽歌の

磯の上に根延ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか
(卷三・四四八番歌。傍線部の原文は「語將告可」)

の例がそれである。このように、借訓文字の例とそうでない例が並

存する状況の中で、借訓文字と捉えることが妥当とは言えない。山上憶良の巻五・八九四番歌に「言靈能 佐吉播布国等 加多利繼 伊比都賀比計理」とあるが、赤人富士歌以後の詠作の「加多利繼」の例を赤人富士歌の「語告」に適用するのは無理がある。なぜなら、「加多利繼」は憶良が赤人歌の「語告」を赤人当人の訓みとは別に「語り告ぎ」と訓んだ可能性を物語るからである。また、憶良歌の「加多利繼」が「継」の字のみ仮名でないところからすれば、憶良が赤人の「語告」に対して意識的に「語り継ぎ」の表現を成したということも考えられるからである。いずれにしても、憶良歌の例は赤人歌の「語告」を「語り継ぎ」と訓む根拠にはならない。

それゆえ、赤人富士歌以外の赤人歌や、赤人富士歌の影響を受けたと考えられる歌人の歌の例を検討する必要がある。

赤人の歌では、富士歌と同じ巻三に、東国の下総国を旅した折の「勝鹿の真間娘子が墓を過ぐる時に、山部宿禰赤人が作る歌」(四三一〜四三三番歌)があり、その第一反歌四三二に

我も見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手兒名が奥つ城とこ

と詠んでいるのが目を引く。ちなみに、傍線部の原文表記は「人尔毛将告」。すでに『釋注』に、第一反歌四三二に「赤人が富士の歌で用いた宮廷歌人独特の讚美の表現『語り告げ言ひ継ぎ行かむ』(三一七)と同様な述べ懐」が見られることを指摘している。

赤人以外の歌人の作品では、天平十九年(七四七)の大伴家持の「立山の賦」(巻十七・四〇〇〇〜四〇〇二番歌)が挙げられる。『釋注九』に「国土讚歌である。人麻呂の吉野讚歌(一三六〜九)や赤人の富士

讚歌（三二七〜八）と叙述・構成が似ており、それを意識していることは明瞭。」とある。けれども、具述がないので、本稿が補述する。また、記述がない池主和歌について新たな点を指摘する。

「立山の賦」の長歌四〇〇〇に、家持は、越中国の「常夏に雪降り敷く立山に都から通い続けて、来る年来る年ごとに遠くからなりと」振り放げ見^さては、「万代の語らひぐさと いまだ見ぬ人にも告げむ」音のみも名のみも聞きて 羨しぶるがね」と詠んでいるのである。傍線部は赤人富士歌の原文「語告」を「語り告げ」と家持が訓んでいたことを物語るとともに、それをここに応用したことを示している（先掲拙著『テーマ別万葉集』）。

家持の「立山の賦」に和したのが大伴池主の「敬みて立山の賦に和ふる一首并せて二絶」（四〇〇三〜四〇〇五番歌）である。家持が赤人富士歌の「語告」（語り告げ）の方に重心を置いて詠んだのに対して、池主は赤人富士歌の「語告」（語り告げ）の直下の「言継将往」（言ひ継ぎ行かむ）を意識して、「万代に 言ひ継ぎ行かむ」（四〇〇三）と応じていることを指摘しておきたい。

以上の考察から、赤人富士歌の原文「語告言継将往」は、「語り告げ言ひ継ぎ行かむ」と訓み、「まだ見たことのない人々に 語り告げて（万代の）のちまでも言ひ継いでゆこう。」の意味と考えられるのである。

四、反歌三二八の考察

以上の長歌三二七の次に赤人は反歌三二八を歌った。人口に膾炙している歌である。声に出して歌えば、心が清められるような歌で

ある。

初句「田子の浦」は、現在の富士市の田子の浦とは位置が異なり、興津の東の薩唾山の麓より由比、蒲原を経て吹上浜に至る弓状の入海をさしたものと見られる（澤瀉久孝『萬葉古径』^{注8}）。

「田子の浦」は万葉集中他に二例（巻三・二九七、巻十二・三二〇五番歌）。当面歌に先行する巻三・二九七番歌が注目される。この二九七は二九六とともに在る歌で、次のとおり。

田口益人大夫、上野の国司に任けらゆる時に、駿河の清見の崎に至りて作る歌二首

廬原の清見の崎の三保の浦のゆたけき見つつ物思ひもなし

（二九六）

昼見れど飽かぬ田子の浦大君の命畏み夜見つるかも（二九七）

作者の田口朝臣益人は、和銅元年（七〇八）三月十三日に従五位で上野守に任じられている（続日本紀）。それに拠る旅の途次での歌である。

この二首に、「富士」の言葉は見られないけれども、「三保の浦のゆたけき見つつ」（二九六）や「昼見れど飽かぬ田子の浦」（二九七）の光景の中に、また、「夜見つるかも」（二九七）の夜景の中にも、そびえ立つ富士が在ったであろう。

赤人はこの二首を知っていて、田口益人が直接歌わなかった富士の山を歌ったということが考えられる。赤人は益人の二九六の「ゆたけき見つつ物思ひもなし」の境地に深い共感を寄せつつ、二九七の「夜見つるかも」に対して、昼間の光景の中にそびえ立つ富士を

詠みあげたということが考えられるのである。本稿のこの見解は、赤人が益人の二首を知らない場合でも、結果として言えることである。

「田子の浦ゆ」の「ゆ」は、ここは「くを通つて」の意で、經由を表わす。長歌三二七冒頭の「天地の分けし時ゆ」の「ゆ」は起点の「くから」の意で、長歌と反歌でバリエーションがある。

「うち出でて見れば」は視覚的余りの句。実際には「うち」の「ち」音の母音*i*と「出で」の*i*音が連続して、少し延ばすようにして発音したものと思われる。

この表現は万葉集中他に一例、巻十三・三三三八番歌（三三三六番歌の或本の歌三三七番歌の反歌にあたる）に次のように用いられている。

逢坂をうち出でて見れば近江の海白木綿花に波立ちわたる

一首は「逢坂の峠をうち出て見ると、おお、近江の海、その海には白木綿花のように、波が立ち渡っている。」の意。

『釋注七』に、この歌の「白木綿花」の句が、巻六の「九〇九など、奈良朝の歌に見える。反歌は奈良朝になつて添えられたものか。」と述べている。「白木綿花」の句は他に三例、「山高み白木綿花に落ちたぎつ」（巻六・九〇九番歌、養老七年（七三三）五月、笠金村）、「泊瀬川白木綿花に落ちたぎつ」（巻七・一一〇七番歌）、「山高み白木綿花に落ちたぎつ」（巻九・一七三三番歌、式部大倭。いずれも奈良朝の歌と認められる。笠金村の例以外の二例は、金村の例に学んだものと思われる。

天平九年（七三七）四月に大伴坂上郎女が詠んだ巻六・一〇一七番歌の題詞に

夏の四月に、大伴坂上郎女、賀茂神社を拝み奉る時に、すなはち逢坂山を越え、近江の海を望み見て、晩頭に帰り来りて作る歌一首

と、三三三八番歌と同様の内容が記されていることも参照される。以上のことから、三三三八番歌は奈良朝の歌であると推断できる。そして、金村の九〇九番歌の「白木綿花に」の美しい比喻表現と、赤人富士歌三二八の「うち出でて見れば」の空間表現に学んで詠み成したものと言えよう。

「田子の浦ゆうち出でて見れば」は、山の麓を通る東海道の田子の浦の海岸線の道を通つて、視界が開けて富士を見ることができるところに出で見ると、の意味と考えられる。その地点は、さえぎつていた山が途絶えて視界が開ける、当時の富士川下流と入海の接する地点で、現在の吹上浜近くか（上掲『萬葉集古怪』）、岩淵近くであろうか。三保の浦（一九六番歌）や田子の浦（一九七番歌）よりも富士に近づいた地点であることは確実である。それゆえ長歌三二七では、大きく迫る富士をもとに、「渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり 時じくぞ雪は降りける」と詠み、反歌三二八では視界に大きく入ってきた「真白」の印象を「真白にぞ」と感動をもつて捉えているのである。長反歌の描写は題詞の「富士の山を望る」ということから逸脱してはいない。「真白にぞ」の「ぞ」は視覚的には係助詞で下の「雪は降りける」の連体形「ける」と呼

応して係り結びをなす。けれども、声に出して第一句から詠んでゆくと、「真白にぞ」の「ぞ」は終助詞的な強い詠嘆性を有していることがわかる。

「真白に」は集中にこの一例のみ。「真白」は他に後の大伴家持の「白き大鷹を詠む歌」（巻十九・四一五四〜五番歌）の反歌四一五五に、「矢形尾の真白の鷹」の例がある。赤人の「真白」の応用であろう。「真白にぞ」の原文表記は「真白衣」。「衣」の表記は「真白」と縁をなす（先掲拙著『テ・マ別万葉集』「山部赤人の富士の山を望る歌」）。「衣」の仮名は、「公衣恋流」（巻十一・二五九八番歌）、「天雲之外衣」（巻十三・三三二五九番歌）の使用例がある。後者の例は、女性の片恋の歌（三三五八〜九番歌）の長歌末尾の嘆きの表現「白袴の我が衣手も通りて濡れぬ」（衣の袖までも涙で濡れ通ってしまった、の意）の「我が衣手」と対応させて、つれない男を「天雲のかなたの無関係な衣の君」のような意をこめて、「衣」を用いたものと思われる。

赤人の三二八の「真白衣」も、長歌三一七の「布士能高嶺」の「布」の字と響き合わせて、真白な衣の布のように富士の高嶺に雪が清らかに降り積もっている様を表していると考えられるのである。そして、『百人一首』や『新古今和歌集』（巻六・六七五番歌）の

田子の浦にうち出でて見れば白たへの富士の高嶺に雪は降りつつ

の「白たへの」の表現は、赤人の三二八番歌の「真白衣」の原文表記を「白たへの」と訓んだことに拠ると考えられる（先掲拙著『テ・マ別万葉集』）。または、「真白衣」の表記によって導かれた表現と考えられる（先掲拙著『山部赤人の富士の山を望る歌』）。

第三句の「真白にぞ」の上からの文脈における詠嘆的強調は、下二句において「富士の高嶺に雪は降りける」と詠嘆の具象を明らかにしている。現に見ている富士の高嶺の雪を讃えて歌い収めている。

五、富士とすみれと

反歌三一八の「真白にぞ」の「ぞ」のように、上からの文脈では終助詞的な詠嘆的強調性を表わし、下の文脈に対しては本来の係助詞として機能し、文末の連体形の語と呼応するという用法を持つ歌は、管見では万葉集中他に、赤人の巻八・一四二四番歌に見られるのみである。その歌は、「山部宿禰赤人が歌四首」（巻八・一四二四〜一四二七番歌）の第一首一四二四で、

春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける
 という。「春の野に、すみれを摘もうと思つてやつて来た私、この私は野の美しさに心魅かれて一夜旅寝してしまったことよ。」の意。富士の歌三一八とすみれの歌一四二四は詠作の時期も近いのかもしれない。

このすみれの歌によって富士の歌はいつそう強く照らし出され、富士の歌によってすみれの歌はいつそう強く照らし出される。すなわち、巨視的視点による富士歌と微視的視点によるすみれの歌との相関関係である。この巨視的視点と微視的視点は、赤人の歌と人生の道を歩みゆく時のバランスのとれたものの見方と思考の本質を今

に語り告げている。

二〇一九(令和元)年五月八日

(注)

- 1、一九九六年二月二十五日、集英社発行
- 2、二〇一六年(平成二十八年)十月二十七日、都留文科大学鈴木研究室発行。
この書の中では、「布土」の表記と駿河国風土記逸文の三保の松原の天女の羽衣伝説や『竹取物語』の最後の場面との関わりも説いている。
- 3、平成二十一年十二月二十五日、角川学芸出版発行
- 4、平成十一年三月一日、若草書房発行
- 5、二〇〇一年九月三〇日、和泉書院発行
- 6、二〇〇一年二月二十五日、おうふう発行
- 7、一九九八年五月二十五日、集英社発行
- 8、昭和十六年六月五日、弘文堂書房発行
- 9、一九九七年九月二十五日、集英社発行
- 10、前掲拙著『テーマ別万葉集』では別途の解釈を記したが、現在はこの見解に立っている。
- 11、このこと、久保田淳編『日本文学史』(一九九七年五月二十五日、おうふう発行)の鈴木武晴執筆「上代第三章萬葉集第4節」にすでに指摘している。

(補記)

論文本文中に記すべきことであつたことを補記する。

I、赤人富士歌の長歌三二七の「渡る日の影」を、大伴家持は「病に臥して無常を悲しび、道を修めむと欲ひて作る歌二首」(巻二十・四四六八)

九番歌)の第一首四四六九に「渡る日の影に競ひて尋ねてな清きその道
またもあはむため」と詠んでいる。赤人富士歌とその表現が家持の心に
深く刻まれていたことがうかがえる。

II、万葉の時代から富士の山と三保の地は有機的に関わっていることが、赤
人富士歌の三二七の「布土」や三二八の「真白衣」の表記と駿河国風土
記逸文の三保の天女の羽衣伝説とのかかわりなどから言える。

(付記)

本稿は、都留文科大学文学部国文学科の「古典文学テーマ研究」
の授業などで述べてきた内容をまとめたものである。

本稿の骨子は、山梨県立文学館の「二〇一九年度年間文学講座」
第一回(二〇一九年五月十日)において、「万葉集の山部赤人の富士の
山を望(み)る歌」と題し、資料と口頭で公表した。

受領日 二〇一九年五月八日

受理日 二〇一九年六月二日